

トピックス 2

「無意識の植民地主義」を 意識化することから始めよう

脱植民地化にむけて 沖縄からの実践報告と提案

知念 ウシ

1. 沖縄は日本の植民地である

沖縄は日本の植民地である。現在、沖縄人は日本国民だが、他の日本人とは平等な扱いを受けていない。日本国民は日本人とそれに対して沖縄人、日本国は日本に対して沖縄と分けられている。

その例として、日本の国土面積の0.6%で人口比1%しか占めない沖縄県土に在日米軍基地の74%が置かれていることがあげられる。このように、一地域を犠牲にして、国策である在日米軍基地の負担を負わせ、他の地域はそれによる被害、「敵国」の住民への直接の加害者性、反基地運動などの負担を免れている。沖縄県は確かに「法的」な植民地ではないが、このように植民地主義が行使されているのは植民地ではないのか。したがって、沖縄人は被植民者で、日本人は植民者の立場に立っている。

歴史を振り返れば、沖縄はかつて日本と異なる琉球国であった。日本が近代国家となったときに、武力で併合された。そして、「沖縄県」が置かれたが、台湾や朝鮮への植民地政策と連続体の土地政策や同化政策がとられた。「沖縄県」は内地ではなかった。

第二次世界大戦では、「日本本土防衛」のための時間稼ぎの最後の外地戦たる地上戦闘の場とされ、日米両軍に、沖縄住民の3分の1、4分の1ともいわれる人々が虐殺された。日本敗戦前に米軍に占領され、サンフランシスコ講和条約で、日本の独立と引き換えに、沖縄は日本から分離され、米支配下に置かれた。それに対する住民の抵抗運動は「日本復帰」へと結果した。しかし、それは「沖縄の施政権の米から日本への移管」「日本による琉球再併合」ではなかったか。現在でも、「内地」「内地人（ナイチャー）」と沖縄人が日本（人）と呼ぶときの呼称が残っているが、この権力関係が依然続いていることを示している。基地問題はこの歴史の文脈でとらえられるべきである。

現在沖縄から、米海兵隊普天間基地の県外移設、

日本への引き取り要求が出ている。しかし、それに応え、具体的に引き取ろうとする動きは日本からはまだ出てきていない。

日本では、日本人の圧倒的多数の支持で安定的に、安保条約は維持されている。しかし日本人は基地の負担を引き受けようとはしない。

昨年は553万人の観光客が日本からやってきた。自分が必要と欲しながらも自分の近くに置いておきたくないものを集中的に押しつけているところへ、「好きだ」といって、たくさん日本人が遊びに来る。これは「『基地のある沖縄』が好きだ」という意味なのだろう。

沖縄では基地問題に関わる者の多くが「0.6に74」という数字を口にする。平和運動に参加する者だけではなく、官僚や一般市民でもある。これは先に説明した面積率と基地負担率のことであり、単なる基地反対の意味ではない。不平等の告発なのである。もし、たとえ、沖縄で安保支持が100%であっても、「0.6に74」は加重負担で不平等なのである。

成立している、あるいは覆せていない政策は、国民平等に負担するものである。その政策に不満があるなら、負担しながらその政策を変える、良くするように努力することになる。「すべて国民は、法の下に平等」なのである（日本国憲法第十四条）。そうであるなら、在日米軍基地も平等に負担すべきであろう。沖縄の負担は0.6%か1%か、47分の1か、それとも70年近く負担したのだから0か。基地負担がいやなら、日本人は、まずは引き取って、平等に負担した上で、基地をなくしていくか、引き取りながら、なくしていくか、それしかないだろう。日米安保がなくなるまで米軍基地はどこに置くのか。沖縄にはもう置けない。

しかし、自らが沖縄に基地を押しつけていることを実感、自覚できる日本人は少ないかもしれない。「押しつけているのは、日米両政府であって、自分ではない」と。これが、まさに「無意識の植民地主義」（野村浩也）なのである。しかし、それを意識化できれば、それをやめる第一歩となりうるだろう。

繰り返すが、沖縄の米軍基地の根拠は日米安保条約である。それを締結したのは、日本政府であり、それを認め、容認、覆せていないのは日本国民である。その99%は日本人である。そもそも、1960年の旧安保条約、1970年の新安保条約締結時、沖縄はアメリカの占領下であり、沖縄人はそれについて

意思表示できなかった。

また、「押しつけているのはアメリカである」と思っている日本人もいるかもしれない。

「押しつけ」と呼べるには、それへの「抵抗」があることが前提である。それを押し切ることが「押しつけ」なのではないか。では日本に米軍基地押しつけに反対する抵抗があるだろうか。もちろん、長年頑張る少数の勢力はあるだろう。しかし、沖縄県のように、各都道府県で、人口の10%が集まるような反対県民大会が開かれて来ただろうか。人口の10%が集まる反対国民大会が開かれて来ただろうか。反対の政策を持つ、政権を作り出して来ただろうか。このような「抵抗」を押しつぶして、アメリカが押しつけてきた、といえるだろうか。沖縄人の立場からすれば、日米両政府は共犯して沖縄に基地を押しつけており、日本人はそれを積極的、消極的に支えてきた、と見えるのである。

また、沖縄に軍事基地が集中しているのは、「地政学」、「地理的優位性」から仕方ないことだ、と思っている日本人もいるのかもしれない。

しかし、まず、「仕方がない」と思ってしまうこと自体が、日本人の特権的立場を表している。沖縄人がそのように思うことは自分で自分の首をしめることになる。そもそも、「地政学」や「地理的優位性」などは、地球上の大陸などのように所与の自然の位置ではない。政治的な判断による戦略的なものである以上、日本人は自ら民主主義によって、否定、変更できる。

その上、その「地政学」や「地理的優位性」なるもの自体が怪しいのである。現在、在沖米軍の中心的存在を占める海兵隊はもともと、沖縄戦後ずっと沖縄にいるわけではない。当初は日本の岐阜県と山梨県にあり、1950年代に沖縄に移ってきた。当時、日本では反米軍基地闘争が盛んだったため、政権を維持し、安保を守るために、日米両政府が沖縄に移したようだ。その際「沖縄移転反対」の声は日本では起こらなかった。さらに沖縄の「日本復帰」前後に日本の米軍基地は沖縄の基地へと整理統合され、大幅に縮小され、沖縄の比率が上がっていった。普天間基地移転問題において、その初期から米政府は日本への移転を提案しているが、日本政府は断ってきている。現在、在沖米海兵隊を乗せる艦船は、長崎県佐世保にあり、在沖海兵隊員の戦地投入には佐世保からの艦船を待たねばならず、時間がかかる。

また、アメリカの在沖海兵隊の一部をグアムやオーストラリアへ移す案へは、日頃、沖縄の「地政学」や「地理的優位性」をいう人々も特に反対してはいない。それはなぜなのか。

次に、沖縄は基地と引き換えの振興策によって、儲かっているからいいではないか、という日本人もいるだろう。それなら、70年近く of 多大な基地負担で沖縄は日本国でも有数の金持ち県になっていそうものだが、そうってはいない。また、基地が儲かるなら、この不況時、誘致する他の都道府県が出てきそうものである。逆に、基地がないと、沖縄人は生活に困るだろう、という日本人もいる。振興策で豊かというのと、基地なしでは困るほどの貧困という真逆なイメージが同時に存在している。実際の県経済に占める基地関係の収入は5%である。

また、沖縄人の基地反対の運動が足りないから沖縄から基地がなくならない、と思っている日本人もいるだろう。しかし、こんなにも長期間、県民大会を繰り返すような大規模に反基地運動が繰り返されているところが、日本国のなかに他にあろうか。世界的にもあろうか。沖縄人の声を無視してもいい日本政府を支えているのはいったい誰なのか。

鳩山元首相が「最低でも県外」といって、米軍普天間基地の県外移設を公約し、初めて政策とした。これは彼が突飛なことをいったのではなく、選挙に当選したい民主党が沖縄の有権者の声に応えたのであり、民主的なことだった。そして、その首相と政策、公約を支持せず、つぶしたのは、他の政治家、官僚、マスコミのみならず、日本の一般国民、すなわち日本人であったのではないか。

ところで日本人に対して、基地の引き取り、平等負担を呼びかけていると、「沖縄はもう独立したほうがいい」と返されることが多い。この意味は何か。

まず、その呼びかけには答えない、ということなのだろう。自分が変わりたくないから、沖縄人にやり方を変えろ、といっているのではないか。

「善意」の場合もある。長年、日本の平和運動や社会改革運動に関わっていて、日本を良くすることに自分の力不足や無力感を感じている日本人の場合、自分たちに何かを求められてもどうせ応えられないから、沖縄人の運動のやり方を変えたほうが早いと「アドヴァイス」している。しかしこれも結局は、自分が変わるより、沖縄人になるようにいっていることになる。

また、露骨に「文句があるなら、日本から出ていけ、でもどうせできないだろう、だったら、あきらめろ」という脅しの場合もある。

逆に、他の人よりラディカルで寛容だとの優越感を持ちながら、最終的に自分が責任を持たなくていい立場で、新しい独立国家をつくるという夢や理想を味わっていることもある。

また、沖縄が本気で独立を考えているのではないかと心配して、探っている場合も、最近が多い。

今後は、このように基地を日本に引き取ることから話をはぐらかすように、沖縄のほうが日本国から独立するように、と、日本人から持ちかけられることが増えるだろう。しかし、独立については沖縄人が決めることであり、そして、独立しようがしまいが、沖縄に置かれている基地は日本に引き取ってもらわなければならない。

最近、開発段階から墜落を繰り返した、米軍の非常に危険な垂直離着陸輸送機 MV オスプレイが、沖縄の普天間基地に配備されるのみならず、日本でも低空飛行訓練をするといわれている。この事態を「日本の沖縄化」と呼ぶ日本人がいる。この場合の「沖縄化」とは、「基地化」や「基地による被害を受ける」という意味であろう。このようなネガティブな状態を表現するのに、他の地域の名前を用いるとは、なんと厚かましいことだろう。しかも、沖縄をこのような状況にしたのは誰なのだ。「日本の沖縄化」といわれる場合の「沖縄」とは、「琉球の日本化」したもので、さらにそれに日本が基地を押しつけている状態のことである。したがって「日本の沖縄化」とは正しくは「日本の日本化」である。自らが沖縄に押しつけてきたものの一部が、自分のところに帰ってきている状態、Colonialism comes home.なのである。しかもそれでも、60年以上70年近い長期にわたる沖縄の基地化とは規模、密度、において比べものにもならないはずである。

2. 被植民者として、脱植民地化の実践報告

日本人の植民地主義は日本人が自らやめない限りなくならない。しかし、沖縄人は、被植民者として、植民地主義に協力しない、共犯者にならない、そして、精神の脱植民地化によって、自分自身を回復する努力をすることはできるだろう。そのための実践を報告する。

(1) 島開き口説

私は「県外移設」を要求する、普天間基地周辺在住・在勤の女性たちでつくる「カマドゥー小たちの集い」とともに活動している。そこでは、基地問題も日本同化教育で奪われてきた琉球語シマクトゥパで議論するよう努めている。この島々に連綿と伝わってきた知識や世界観の蔵である言語で現在の問題をとらえることが重要だからである。そして、以下の歌が生まれた。歌詞はみなで考え、曲は有名な古典の「上り口説」を用いた。

一、^{ふていま} 普天間ぬ空や ^{すら} わったーむん ^{ふていま} 普天間ぬ大地や ^す わったーむんどー ^す 今やさ 揃りてい ^す 島開き (普天間の空、大地は私たちのもの。いまだ一緒に島を開こう)

二、^{なま} 今や金網、^{ひだ} 隔とーしが ^す しまぬ暮らしぬ あいびたん ^す 今やさ 揃りてい ^す 島開き (いまは金網が隔てられているけど、村の暮らしがありました。いまだ一緒に島を開こう)

三、^{じのん} 基地やあらん ^{かんじん} しまどうやる ^{あらく} 宜野湾 ^{さましちや} 神山 ^{なかばる} 新城 佐真下 中原 やいびーん (基地ではなく、宜野湾 神山 新城 佐真下 中原の村なんですー地域の名 著者注)

四、^う 哀り 戦や ^{なち} 終わたしが ^す 懐かししまや ^{とう} 基地に取らり ^{すば} 金網側に ^す 暮らちよーいびーん (つらい戦争は終わったけど、懐かしい村は基地に取られ、金網の側に暮らしています)

五、^{わし} 忘てーうらんさ ^{わし} しまぬくとう ^{わし} 忘りらりーみ ^{くかんが} しまぬくとう ^す 子孫んかい ^す 知らしみら (ふるさとのことは忘れていない、忘れられない。子や孫に教えよう)

六、^{うし} 戦やならん ^{まむ} 教え守てい ^す 闘ていちゃーびーたん ^た 基地反対 やしが ^す くぬ基地や ^す 誰ーむんやが (戦争はダメだとの教えを守り、基地に反対してきたけれど、この基地いったい誰のもの?)

七、^{もとう} 憲法求みてい ^う 復帰しちやしが ^う 安保押しち ^す きらつてい ^す 七四% ^{うぶ} 重さぬ長さぬ ^す かたみららん (憲法を求めて復帰したけど、安保を押しつけられて、74%。重くて長くて担えません)

八、^{きちえー} 基地引き取りよー ^{とう} 日本人 ^{やまとうらんち} いったーむんや ^す く ^す 基地や ^す どうーくるさーに ^す かたみりよ (基地は引き取りなさい、日本人。あなたたちのものだよ、この基地は。自分でなんとかしなさいよ)

九、^{わかむぬ} まんがたみ ^{しわ} すなよーやー ^{わかむぬ} 若者ちゃー ^{しわ} 心配や ^{わらびん} すなよー ^{うらな} 重ちゃー ^{うらな} 沖縄の力 ^す 信じりよ

(若者たちよ、自分のせいだと抱え込まないで。子どもたちよ、心配しないで。沖縄の力を信じなさい)

十、^{うちなー}沖繩^{すら}ぬ空や わったーむん ^{うちなー}沖繩^{なま}ぬ大地や わ
ったーむん^すどー 今やさ ^す揃りとおてい 島開き
(沖繩の空、大地は私たちのもの。いまだ、みんなで力を合わせ、島を開こう)

(2) 基地押しつけと脱出のロールプレイ

日本が沖縄に基地を押しつけ、沖縄人に依存している状況を観念的だけではなく、身体感覚としても理解分析し、それにNOといえる力を発揮するため、以下のようなロールプレイのワークショップをやっている。

①まず、6～7人が一つのグループになる。真ん中の沖縄役の一人の手や足や肩に日本役の他のみんながぶら下がってみる。

②沖縄役の人の感想は「きつい、痛い、倒れそうで怖い」。日本役の人々の感想は「ぶら下がるのにも力がある」。

③次に、日本役がわざわざぶら下がるのではなく、寄りかかえる。沖縄役の人を交替して、他は全員で立ったまま、座ったまま、寄りかかる。「沖縄もつとがんばれ！」と言ってみる人もいた(日本人によくそう言われることがあるので)。

④日本役の感想は「楽ちん。特に間に人を置いて寄りかかっていると沖縄のことを全然意識しない」。沖縄役の感想は「息苦しい。怖い。そこから出たい。がんばれといわれて腹が立つ」。

⑤ここからどうやったら抜け出せるか。「一人じゃなくて誰か一緒だとできるかも」ということで、次は二人組で沖縄役をやった。すると、この二人は一緒に作戦を立て、声を掛け合いながら、寄りかかられている中心から抜け出した。

⑥次にこれを参加者全員(およそ20人)で役を交代しながら、やってみた。終わってからの感想は以下の通り。「今の状況を体で感じられてよかった」「状況には必ず隙ができる。そこをねらえばいい。今がその隙だ」「沖縄人がスクラムを組んでシマクトッパで大声を出せば、相手はひるむからそれがチャンス」。

⑦反省点として、「自分たちがそこから逃げるといえるのはおかしい」「植民者をどかさないといけない。そのためにはどうするか」ということがあがった。(『うないフェスティバル2011 事業報告書』那覇女性センターより)

3. 提案——植民者の脱植民地化 植民者をやめるために

日本人は植民者をやめるにはどうすべきか。まずそれは、沖縄から基地を引き取ることから始まるだろう。基地を引き取るのは「日本人としての責任」(高橋哲哉)なのである。

そのために、まず、自分たちが基地を押しつけていることに気がつかなければならない。本稿前半において、私が記述した沖縄への基地押しつけについての日本人の「無意識の植民地主義」について、さまざまな反発や困惑などの感情が湧いてきただろう。それを話し合ってみるのもいいだろう。そして、ぜひ、私が先に紹介したロールプレイをかわるがわるやってみることをお勧めする。その場合、自分ほどの位置にどんな身体感覚、感情でいるのかに、気がついてみるのが大切だ。

日本人の植民地主義をやめさせることができるのは、日本人だけだ。日本人はなによりもみずからの脱植民者化に取り組みなくてはならない。沖縄に移住したり、被植民者の共同体に入り込み、その脱植民地化の試みを「応援」「指導」しようとしてはならない。「植民地主義者はしまいには『私があなた方に植民地から解放される方法を教えてあげよう』という」(アシス・ナンディ)からだ。そして、植民者の植民地への「移住」とは、「安易さが欲しいからなのだ」(アルバール・メンミ)。そして、「沖縄ストーカー」(野村浩也)となってはならない。それは、マルコムXの白人分析からの概念だ。すなわち、黒人組織に参加したが、黒人につきまとう白人は、自分が「黒人と一緒」と「証明」し、自分の良心の痛みを癒すことを目的とする逃避主義者ではないか、とマルコムXは分析するのだ。

自らの場で自らの脱植民地化に取り組むことによってはじめて、日本人と沖縄人は東アジアの片隅で、出会い直せるのかもしれない。

参考文献

- アルバール・メンミ『植民地 その心理的風土』明石書店、1959年。
野村浩也『無意識の植民地主義 日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房、2005年。
屋良朝博『砂上の同盟 米軍再編が明かすウソ』沖縄タイムス社、2009年。
知念ウシ『ウシがゆく 植民地主義を探検し、私を探す旅』沖縄タイムス社、2010年。
高橋哲哉、知念ウシ対談／「復帰と呼ばないで」朝日新聞、2012年5月15日。